『修養』の核心は
プロレタリア独裁への裏切りにある

社会主義の道を歩むのか
それとも資本主義の道を歩むのか

北京　外文出版社

『修養』の核心はプロレタリア独裁への裏切りにある

『紅旗』編集部　『人民日報』編集部

（1967年5月8日）

社会主義の道を歩むのかそれとも資本主義の道を歩むのか

『紅旗』編集部　『人民日報』編集部

（1967年8月15日）

外文出版社
北京

毛主席のことば

世界のすべての革命闘争は、権力を奪取し、権力を強化するためのものである。

『今年の選挙』

毛主席のことば

社会主義制度は、とどのつまり、資本主義制度にとってかわるであろう。これは人びとの意志によっては左右できない客観法則である。反動派がどのように歴史の車輪の前進をはばもうとしても、革命は、おそかれ早かれ起こるし、また、かならず勝利をおさめるであろう。

『ソ連最高会議の偉大な十月社会主義革命四十周年祝賀会における講話』

目次

『修養』の核心はプロレタリア独裁への裏切りにある……1
『紅旗』編集部『人民日報』編集部（一九六七年五月八日）
社会主義の道を歩むのか、それとも資本主義の道を歩むのか……23
『紅旗』編集部『人民日報』編集部（一九六七年八月十五日）

『修養』の核心は

プロレタリア独裁への裏切りにある

『紅旗』編集部　『人民日報』編集部

（一九六七年五月八日）

世界のすべての革命闘争は、権力を奪取し、権力を強化するためのものである。そして、革命勢力にたいする反革命の死にものぐるいの闘争も、まったくかれらの権力を維持するためのものである。

毛沢東

『修養』は、党内最大の資本主義の道をあゆむ実権派の代表作である。この本は、反マルクス・レーニン主義、反毛沢東思想の大毒草である。それは全国に害毒を流し、世界に害毒を流

している。この本にたいして徹底的な批判をくわえなければならない。

『修養』の核心はなにか。

その核心は、マルクス・レーニン主義のプロレタリア独裁の学説を裏切ったことである。プロレタリア独裁の学説を裏切ったということは、マルクス・レーニン主義を全面的、徹底的に裏切ったということであり、プロレタリア階級の革命事業を全面的、徹底的に裏切ったということである。

マルクスは百余年前にはやくもこう指摘している。

「ところで、わたしについていえば、近代社会に諸階級が存在していることを発見したという功績も、それらの階級相互間の闘争を発見したという功績も、わたしのものでない。わたしよりもずっとまえに、ブルジョア歴史学者たちがこの階級闘争の歴史的発展をのべていたし、ブルジョア経済学者たちは各階級にたいして経済的解剖をおこなった。わたしが新しくやったことは、つぎの点を証明したことである。（一）諸階級の存在は、生産の特定の歴史的発展段階だけにむすびついたものであるということ、（二）階級闘争は、必然的にプロレタリア独裁へみちびくということ、（三）この独裁そのものは、いっさいの階級の廃絶と無階級社会とに

いたる過渡をなすにすぎないということ、これである。」①

レーニンも五十年前すでに強く指摘している。

「マルクスの学説の主要な内容は階級闘争である。しばしば、人びとは、こうかたり、またこう書いている。だがこれは正しくない。そして、この正しくない観点にもとづいて、マルクス主義を日和見主義に歪曲し、マルクス主義をブルジョア階級にうけいれられるように偽造することが、いたるところで生じている。なぜなら、階級闘争の学説は、マルクスではなく、マルクス以前にブルジョア階級がつくり出したものであって、一般的にいえば、ブルジョア階級にうけいれられるものだからである。階級闘争を承認するにすぎないものは、まだマルクス主義者ではない。そういう人はブルジョア思想とブルジョア政策とのわくをまだ出ていないこともありうる。マルクス主義を階級闘争の学説にかぎることは、マルクス主義を切りちぢめ、歪曲し、それをブルジョア階級にもうけいれられるものに変えることを意味する。階級闘争の承

① マルクス、「J・ワィデマィヤーへ」（一八五二年三月五日）、『マルクス・エンゲルス選集（二巻集）』第二巻

認をプロレタリア独裁の承認に拡張する人だけが、マルクス主義者である。この点に、マルクス主義者と月なみな小ブルジョア（ならびに大ブルジョア）とのもっとも大きな相違がある。この試金石で、マルクス主義をほんとうに理解し承認しているかどうかをためさなければならない。」①

『修養』の著者は、国際共産主義運動の歴史におけるすべての日和見主義者と同様に、根本的な点でマルクス主義を割愛し、歪曲している。かれは五万字にちかいこの本のなかで、階級闘争についての抽象的な字句をいくらかならべたててはいるが、現実の階級闘争についてはひと言も語らず、プロレタリア独裁についてはひと言もふれていない。プロレタリア独裁が必要でないなら、そうした階級闘争についての字句はたんなる人をあざむくデタラメにすぎないのは当然であるし、ブルジョア階級に全面的にうけいれられるのは当然である。

『修養』は、一九三九年七月に初版が出され、抗日戦争の時期と解放戦争の時期にたびたび版をかさねた。このなん種類かの版は、まったく、抗日戦争にもふれていなければ、抗日戦争

① 「国家と革命」（一九一七年八―九月）、『レーニン全集』第二十五巻

の時期における階級闘争＊にもふれておらず、解放戦争にもふれていなければ、解放戦争の時期における階級闘争にもふれておらず、また政権奪取の問題にもふれていない。このような『修養』は、日本帝国主義にかすり傷ひとつ負わせることができず、アメリカ帝国主義やその手先蔣介石国民党にかすり傷ひとつ負わすことができなかったのである。

毛主席は抗日戦争の時期にこう指摘している。「革命の中心任務と最高の形態は、武力による政治権力の奪取であり、戦争による問題の解決である。」①「わが党の発展、強化およびボリシェビキ化は、革命戦争のなかですすめられており、武装闘争なしには、こんにちの共産党もありえない。」② きわめて明らかなように、革命戦争をぬきにし、武力による権力の奪取をぬきにして、党の発展、強化、建設を語ることは全然できず、党員の思想改造を語ることも全

＊『修養』という本は、一九六二年以前の各版では、抗日戦争にふれていない。一九六二年の新版では、「理論学習と思想意識の修養は統一したものである」という章に、例として、抗日民族統一戦線政策についての一節を書きくわえている。

① 「戦争と戦略問題」、『毛沢東選集』第二巻

② 「『共産党人』発刊のことば」、『毛沢東選集』第二巻

然できない。ところが、こうした硝煙のたちこめていた戦争の時代、権力奪取をめざしていた時代に、党内最大の資本主義の道をあゆむ実権派は、人びとに武力による権力の奪取という根本的任務をほっておいて、「自己修養」につとめるよう要求したのである。このように「修養」していくということは、人びとに革命戦争もやらなければ権力も奪取しようとしない俗物になるよう修養せよと要求することではないか。このように「修養」してできあがった俗物は、絶対に共産主義者ではなく、それは第二インターの社会民主主義者である。

『修養』は、一九四九年八月に改訂再版され、一九六二年八月には大幅な増補削除のうえ版をあらためて発行されたが、それはやはりもとどおりの内容のものにすぎなかった。この時期に改訂再版され、また版をあらためて発行された『修養』は、社会主義革命や社会主義社会の階級闘争について全然のべていないばかりでなく、依然としてプロレタリア独裁についてもひと言もふれていない。党内最大の資本主義の道をあゆむ実権派は、**毛主席の『中国共産党第七期中央委員会第二回総会での報告』**、**『人民民主主義独裁について』**、**『人民内部の矛盾を正しく処理する問題について』**などの一連の偉大な著作に公然と反対し、毛沢東思想に公然と反対し、人びとに社会主義革命を忘れ、社会主義社会の階級闘争を忘れ、プロレタリア独裁を忘

れて、「自己修養」につとめるよう要求した。このような「修養」は、人びとを「修養」の結果社会主義をおしすすめるのでなく資本主義をおしすすめるブハーリン型の人物にし、また「修養」の結果プロレタリアート独裁を必要としないで資本主義を復活させるフルシチョフ型の人物にしてしまうことになるではないか。

『修養』はたびたび印刷に付され、版をかさねたが、どの版も武力による権力の奪取にふれず、プロレタリア独裁にふれていない。これは偶然の手落ちであろうか。いや、そうではない。

『修養』は国家の問題について語っている。マルクス主義者であれば国家の問題について語る場合、国家の階級的性格について語らないはずは絶対になく、プロレタリア独裁について語らないはずは絶対にないのである。ところが、『修養』は意識的にプロレタリア独裁をぬきにして、ブルジョア御用学者のように、国家の問題を抽象的に語っているのである。

『修養』の作者はこうのべている。プロレタリア階級は「厳格な組織規律をもった党と国家機関をうちたてて、すべての腐敗、官僚化、堕落の現象と妥協のない闘争をおこない、党内と国家機関から、すでに自分の仕事のなかで腐敗、官僚化、堕落した分子をたえず洗いおとし

て」、「党と国家機関の純潔をたもつことができるのである」と。そこで、たずねたい。プロレタリア階級はどのようにすれば、みずからの国家機構をうちたてることができるのか。暴力革命を経ないでもよいというのか。ふるい国家機構をうち砕かなくてもよいというのか。『修養』は、まさにマルクス・レーニン主義のこうした根本原理をなげすててしまっている。『修養』の著者の目からみれば、共産主義者が「自己修養」につとめさえすれば、天から「ユートピア」が降ってくるのである。かれが寝てもさめても追求しているのは、ほかでもなく、ブルジョア国家なのである。

一九六二年に再版された『修養』は、うえに引用した一節に、とくに「集中もあり民主もある国家機関をうちたてる」ということばを書きくわえている。とくに加筆されたこの部分は、わが国の性格についての著者の見方をしめしている。だが、この部分でも、またこの本の全体をつうじても、かれは階級敵にたいする独裁に全然ふれていない。**毛主席はこうのべている。われわれのプロレタリア国家は、階級敵には独裁を実行し、「人民内部では民主集中制を実行する」**、と。『修養』の著者は、われわれの国家を、ただ「集中もあり民主もある」だけで、敵にたいして独裁を実行しない国家であるとえがき出している。これはプロレタリア独裁に反

対し、フルシチョフの「全人民の国家」論を宣伝し、ブルジョア独裁の実行を主張するものでなくてなんであろうか。

『修養』はひじょうに多くのページをさいて、「共産主義事業は人類の歴史上空前の偉大な、困難にみちた事業である」とのべたてている。マルクス主義者であるなら、ここでかならず、プロレタリア独裁を経てはじめて、共産主義を実現することができることを説かなければならない。ところが、著者はプロレタリア独裁にはひと言もふれていないのである。

「共産主義事業とはいったいどんなことなのか。われわれ党員はいったいどのようにわれわれの事業をすすめていけばよいのか」　著者は答えていう。「そのような世界には、搾取者も、抑圧者もいなければ、地主も、資本家もいないし、帝国主義者やファシストなどもいないし、また抑圧され、搾取されている人民もいなければ、暗黒、愚まい、立ちおくれなどもない。このような社会では、人類はみな高い文化程度と技術をもち、公正無私で聡明な共産主義者になり、人類のあいだに相互援助、相互親愛がみちあふれ、『たがいにだましあったり、たがいに危害をくわえあったり、たがいに殺しあい、戦争しあうなどなどの不合理なことはなくなる。このような社会は、もちろん、人類の歴史上もっともすばらしい、もっとも美しい、

もっとも進歩した社会である」、と。著者はまたいう。「われわれ共産党員は人類のもっとも偉大な気迫と革命の決意をもつべきである。一人ひとりの党員はみなよろこんで、厳粛に自分の決意をかためて、共産主義というこの人類の歴史上空前の偉大で困難にみちた任務をになうべきである」、と。著者はこれに類した、種々さまざまな牧師まがいの祈祷や願掛けをおこなってから、結論をくだして、「わたしの理解している共産主義事業とは、つまりこういうことである」といっている。著者は回答のなかで、結構づくめの話をならべたてはいるが、プロレタリア独裁だけはのぞいているのである。かれの理解する共産主義事業、かれの主張する共産主義事業のすすめ方とは、もともとこのようなものであったのである。

共産主義社会にたいするこのような描写は、なにも新しいものではなく、とっくのむかしから存在している。中国には、『礼運・大同篇』*があり、陶潛**の『桃花源記』があり、康

* 『礼運』は『礼記』のなかの一篇で、西漢時代（紀元前二〇六―紀元二四年）の学者戴聖の編さんしたものである――訳注

** 陶潛は東晋時代（三一七―四〇二年）の詩人――訳注

有為*の『大同書』がある。外国にも、フランスとイギリスの空想的社会主義者のおびただしい著作がある。これらはみな同じ種類のしろものである。

著者の見解によれば、共産主義社会では、すべて結構なことばかりで、少しの暗い面もなければ少しの矛盾もなく、すべてがうまくいっていて、対立物がない。社会はそれ以後発展を停止し、社会の質は永遠に変化しないばかりか、社会の量もまるで永遠に変化しないかのようになり、社会の発展はそこで終わりをつげ、永遠に同じ姿をたもつ――というのである。ここで、著者は、マルクス主義の基本的法則――いかなる事物、いかなる人類社会もみな対立物の闘争によって、矛盾によって動かされ、発展するものである――をなげすてている。著者はここで、形而上学を宣伝し、偉大な弁証法的唯物論と史的唯物論を放棄しているのである。

マルクスはこうのべている。「資本主義社会と共産主義社会とのあいだには、前者から後者への革命的転化の時期がある。この時期に照応してまた政治上の過渡期がある。この過渡期の国家は、プロレタリア階級の革命的独裁でしかありえない。」①

* 康有為（一八五八―一九二七年）は近代ブルジョア改良主義運動の指導者――訳注

① 「ゴータ綱領批判」、『マルクス・エンゲルス全集』第十九巻

レーニンはのべている。「共産主義への発展は、かならずプロレタリア独裁をつうじておこなわれるのであって、絶対にそれ以外の道をすすむことはできない。なぜなら、資本家的搾取者の反抗をうちくだくことは、他のだれもできないし、また他のどんな方法によってもできないからである。」①

党内最大の資本主義の道をあゆむ実権派は、『修養』のなかで、プロレタリア階級が政治的勝利をかちとったのち、「さらに社会主義の長期にわたる改造の時代を経なければならず、最後にはじめてだんだんと共産主義社会に移行していくことができるのである」と強調してのべている。マルクス主義に多少でもつうじている人なら、ここでプロレタリア独裁にふれるのが普通である。ところがふれていない、やはり、ひと言もふれていないのだ。これからもわかるように、かれのいう「長期にわたる改造の時代」とはプロレタリア独裁の時代ではないのであり、かれのいう「だんだんと共産主義社会に移行していく」道とは、プロレタリア独裁の道ではないのである。

きわめて明白なように、『修養』の著者は、みずからの完成された思想体系をもっている。

① 「国家と革命」（一九一七年八―九月）、『レーニン全集』第二十五巻

それはプロレタリア独裁を必要としないで、「共産主義事業をおしすすめる」ということである。これは科学的共産主義にたいする徹底した裏切りであり、マルクス・レーニン主義、毛沢東思想にたいする徹底した裏切りであり、それは徹底した修正主義である。

『修養』の著者は、自分自身がプロレタリア独裁にふれないばかりか、レーニンのことばを二節引用したときでさえ、プロレタリア独裁ということばをけずりとっている。

レーニンの原文はつぎのとおりである。

「ブルジョア階級の反抗は、かれらが打倒される（たとえ、一国内であれ）ことによって十倍にも凶暴になる。かれらの強大さは、国際資本の力、かれらのもつさまざまな国際的連系の力と強固さにあるばかりでなく、習慣の力、小規模生産の力にもある。なぜなら、小規模生産は、残念ながら、いまなおこの世におびただしくのこっていて、この小規模生産が、資本主義とブルジョア階級を、たえず、毎日、毎時間、自然発生的に、大規模に生みだしているからである。すべてこういう理由からして、**プロレタリア階級の独裁は必要である。**そして、忍耐、規律、剛毅、不屈、意志の統一を必要とする、長期にわたる、ねばり強い、死にものぐるいの生死をかけたたたかいがなければブルジョア階級に勝つことはできないのである。」

ところが、『修養』の各版――一九六二年の新版をふくむ――の引用はこうなっている。

「ブルジョア階級の反抗は、かれらが打倒される（たとえ、一国内であれ）ことによって十倍にも凶暴になる。かれらの強大さは、国際資本の力、かれらのもつさまざまな国際的連系の力と強固さにあるばかりでなく、習慣の力、小規模生産の力にもある、なぜなら、小規模生産は、残念ながら、いまなおこの世におびただしくのこっていて、この小規模生産が、資本主義とブルジョア階級を、たえず、毎日、毎時間、自然発生的に、大規模に生みだしているからである。すべてこういう理由からして、……忍耐、規律、剛毅、不屈、意志の統一を必要とする、長期にわたる、ねばり強い、死にものぐるいの生死をかけたたたかいがなければ、ブルジョア階級に勝つことはできないのである。」

『修養』の著者は、このように露骨に、文章のなかから「**プロレタリア階級の独裁は必要である**」をぬきだして切りすてたのである。これは偶然の手落ちだろうか。この党内最大の資本主義の道をあゆむ実権派にとっては、プロレタリア独裁が必要でないのは、きわめて明らかである。

もう一節とりあげてみると、レーニンの原文はつぎのようになっている。

「階級を廃絶することは、地主と資本家を追いだすこと――われわれは、これを比較的たやすくやりとげた――だけを意味するものではなく、小商品生産者を廃絶することをも意味しているが、かれらを追いだすことはできるものでなく、押しつぶすこともできるものでなく、かれらとは仲よく暮らしていかなければならない。長期にわたる、漸進的な、慎重な組織活動によってはじめて、かれらを改造し、再教育することができる（またそうすべきである）。かれらは、小ブルジョア的な雰囲気で、四方八方からプロレタリア階級をとりまき、それをプロレタリア階級にしみこませ、それによってプロレタリア階級をむしばみ、たえずプロレタリア階級の内部に小ブルジョア的な無定見、細分状態、個人主義を、また熱狂から意気消沈への変転のぶりかえしを引きおこしている。こうした悪影響を排除し、プロレタリア階級のもっている組織者としての役割（これが、プロレタリア階級の主要な役割である）をただしく、効果的に、また勝利のうちに果たすためには、プロレタリア階級の政党の内部に、もっとも厳格な集中制と規律が必要である。**プロレタリア独裁は、旧社会の諸勢力と伝統にたいする頑強な闘争であり、流血のものもそうでないものも、暴力的なものも平和的なものも、軍事的なものも経済的なものも、教育的なものも行政的なものもある。**幾百万人、幾千万人の習慣の力は、もっ

ともおそるべき力である。**闘争のなかできたえられた鉄のような党がなく、その階級のすべての誠実な人から信頼されている党がなく、大衆の気分を察し、大衆の気分に影響をおよぼすことに長じている党がなければ、このような闘争を成功させることはできない。**強大で集中化されたブルジョア階級に打ち勝つことは、何百万もの小経営主に『打ち勝つ』ことよりも、千分の一も容易である。小経営主は、日常的に、日ごとに、気づかない、とらえどころのない腐敗作用をおよぼす活動によって、ブルジョア階級に必要な結果、ブルジョア階級を復活させる結果を生みだしている。」

ところが『修養』の各版――一九六二年の新版をふくむ――の引用はつぎのとおりである。

「階級を廃絶することは、地主と資本家を追いだすこと――われわれは、これを比較的たやすくやりとげた――だけを意味するものではなく、小商品生産者を廃絶することをも意味しているが、かれらを追いだすことはできるものでなく、押しつぶすこともできるものでなく、かれらとは仲よく暮らしていかなければならない。長期にわたる、漸進的な、慎重な組織活動によってはじめて、かれらを改造し、再教育することができる（またそうすべきである）。かれらは、小ブルジョア的な雰囲気で、四方八方からプロレタリア階級をとりまき、それをプロレ

タリア階級にしみこませ、それによってプロレタリア階級をむしばみ、たえずプロレタリア階級の内部に小ブルジョア的な無定見、細分状態、個人主義を、また熱狂から意気消沈への変転のぶりかえしを引きおこしている。こうした悪影響を排除し、プロレタリア階級のもっている組織者としての役割（これが、プロレタリア階級の主要な役割である）をただしく、効果的に、また勝利のうちに果たすためには、プロレタリア階級の政党の内部に、もっとも厳格な集中制と規律が必要である。……幾百万人、幾千万人の習慣の力は、もっともおそるべき力である。……強大で集中化されたブルジョア階級に打ち勝つことは、何百万もの小経営主に『打ち勝つ』ことよりも、千分の一も容易である。小経営主は、日常的に、日ごとに、気づかない、とらえどころのない腐敗作用をおよぼす活動によって、ブルジョア階級に必要な結果、ブルジョア階級を復活させる結果を生みだしている。」

『修養』の著者は、またも露骨に、文章のなかから「**プロレタリア独裁は、旧社会の諸勢力と伝統にたいする頑強な闘争であり、流血のものもそうでないものも、暴力的なものも平和的なものも、軍事的なものも経済的なものも、教育的なものも行政的なものもある**」をぬきだして切りすてた。しかも、**共産党の指導までも切りすててしまったのである。**これもまた偶然の

手落ちといえるだろうか。

『修養』は、一九六二年に改訂再版されたが、なぜこの版でもプロレタリア独裁は削除されたままだったのか。これには、ただひとつの解釈しかできない。それは、われわれのプロレタリア独裁の国家に反対し、プロレタリア独裁をブルジョア独裁に変えようとしているということである。

このことから、この最大の資本主義の道をあゆむ実権派は、プロレタリア独裁の不倶戴天の敵であること、かれはプロレタリア独裁を絶対に容認することができず、「プロレタリア独裁」という字句を一目見ると、どうしてもそれを切りすてないではいられないことが完全に立証される。

党内最大の資本主義の道をあゆむ実権派は、このように恥知らずにもマルクス・レーニン主義の魂を骨ぬきにしてしまったのである。

党内最大の資本主義の道をあゆむ実権派は、プロレタリア独裁を裏切っていながら、「マルクス、エンゲルス、レーニン、スターリンのもっともりっぱな生徒になる」などといっている。これは、マルクス、エンゲルス、レーニン、スターリンにたいするこのうえなく大きな侮

辱である。

一九六二年に再版された『修養』は、「マルクス、エンゲルス、レーニン、スターリンのもっともりっぱな生徒になる」を「マルクスとレーニンのよき生徒になる」に改め、しかももと引用していた『ソ連共産党（ボリシェビキ）歴史小教程』第四章の三節を全部けずりとってしまった。この三節の内容はつぎのとおりである。

「人間は自然とたたかい、自然を物質的財貨の生産のために利用するが、たがいに孤立したり、たがいにはなればなれになったり、それぞれ単独でそれをおこなうのではなく、団体を単位とし、社会を単位として、共同でおこなうのである。そのため、生産はいつでもまたいかなる条件のもとでも、社会的生産なのである。人間は物質的財貨の生産を実現させるにあたって、生産の内部である種の相互関係つまりある種の生産関係をうち立てる。」

「生産の第一の特徴は、生産が長期にわたってはけっして一ヵ所に停止せず、つねに変化と発展の状態にあること、同時に、生産方式の諸変化は、社会制度、社会思想、政治的見解、政治制度全部の変化を必然的に引きおこすこと、つまりこれらの変化は社会、政治構造全体の再編成を引きおこすことである。」

「発生し、発展しつつあるもののみが、打ち勝つことのできないものである。」

きわめて明らかなように、『修養』の著者が一九六二年にスターリンの名を削除し、もと引用していた『ソ連共産党（ボリシェビキ）歴史小教程』第四章の引用文全部を削除したのは、まったくソ連修正主義グループの必要に迎合したのであり、スターリンに反対することで、レーニン主義に反対したのである。

かれはスターリンの名をけずるために、エンゲルスをもまきぞえにし、エンゲルスの名も削除してしまった。

『修養』はたびたび印刷され、版をかさねたが、そのいずれにも毛主席のりっぱな生徒になるということを全然のべておらず、毛沢東思想に全然ふれていない。この点からも、『修養』の著者がニセのマルクス主義者、真の修正主義者であることが証明されるのである。なぜなら、われわれの時代においては、毛沢東思想から離れることは、マルクス・レーニン主義に根本的にそむくことだからである。それは、マルクス主義がレーニン主義の段階に発展したとき、レーニン主義から離れることは、マルクス主義に根本的にそむくことと同じである。

毛主席は、「世界のすべての革命闘争は権力を奪取し、権力を強化するためのものである」

とわれわれに教えている。①

ところが、党内最大の資本主義の道をあゆむ実権派は、それとは正反対の道をあゆみ、プロレタリア階級と共産主義者に、権力を奪取し、権力を強化することを要求するのでなく、世界のいっさいを「自己修養」に帰結させているのである。

「修養がすべてであって、別に目的はない」――これこそ『修養』の公式である。この公式は、ふるい裏切り者ベルンシュタインの「運動がすべてであって、別に目的はない」という公式と同様に、かけ値なしの修正主義のしろものである。

ほんとうに目的がないのだろうか。もちろん、そうではない。党内最大の資本主義の道をあゆむ実権派は、ふるい裏切り者ベルンシュタインと同様に、陰険な、腹黒い目的をもっている。かれはプロレタリア階級の隊列をきりくずそうとして、人びとが「養え」ば「養う」ほどますます「修」になり、「修養」すれば「修養」するほどますます修正主義になるようにしむけている。かれは全国的勝利がかちとられる前は、プロレタリア階級の権力奪取に反対し、全国的勝利がかちとられてからは、プロレタリア独裁に反対し、資本主義を実行し、資本主義を

① 『今年の選挙』（一九三三年九月六日）、一九三三年九月六日づけ『紅色中華』

復活しようとしてきた。これこそ、かれの「修養がすべてであって、別に目的はない」というこの反動的公式の目的なのである。

社会主義の道を歩むのか
それとも資本主義の道を歩むのか

『紅旗』編集部　『人民日報』編集部

（一九六七年八月十五日）

現代の中国は、世界の矛盾の焦点であり、世界革命の嵐の中心である。

中国はどこへいくのか。社会主義の道をあゆむのか、それとも資本主義の道をあゆむのか。これは中国の政治の根本問題であるばかりでなく、同時に世界のプロレタリア革命の命運にかかわる問題でもある。

この根本問題をめぐって、中国革命の発展のそれぞれの歴史的段階に、また革命の転換のそれぞれのカギとなる時機に、中国共産党の内部では、数十年らい二つの根本的に対立した路線がずっと存在してきており、はげしい闘争がおこなわれてきている。

一つの路線は、中国革命はかならずプロレタリア階級による指導を堅持し、新民主主義革命

の段階を経て社会主義革命の段階に転化させ、プロレタリア独裁のもとでの革命をあくまでおしすすめ、共産主義の実現をその究極の目標とするものである。これはわれわれの偉大な指導者毛主席に代表されるプロレタリア革命路線である。

いま一つの路線は、中国革命におけるプロレタリア階級の指導権を解消し、ブルジョア改良主義を実行し、社会主義の段階では社会主義革命に反対し、プロレタリア独裁に反対して、資本主義の道をあゆもうとするもの、つまり、中国を半植民地・半封建的社会の暗黒のふるい道にひきもどそうとするものである。これは陳独秀、瞿秋白、李立三、王明、張国燾から資本主義の道をあゆむ党内最大の実権派までが一脈相つうじておしすすめてきたブルジョア反動路線である。そして、資本主義の道をあゆむ党内最大の実権派が、この反動路線をもっとも集中的な形で代表しているのである。

二つの根本的に対立した路線は、中国革命のあきらかに相反する二つの前途と命運を決定する。中国革命は、まさにこの二つの路線の闘争のなかで、われわれの偉大な指導者毛主席にみちびかれて、いばらの道を切りひらき、勝利のうちに前進してきたのである。

この闘争の本質は、中国がどのような道をあゆむかという問題にほかならない。闘争の集中

点は、終始権力の問題、つまり、どの階級によって独裁をおこなうかという問題にあった。

（一）

われわれの偉大な指導者毛主席はわれわれにつぎのように教えている。民主主義革命の段階では、中国共産党の綱領の集中点は、プロレタリア階級が指導するいくつかの革命的階級の連合独裁にあり、社会主義革命の段階では、中国共産党の綱領の集中点は、人民民主主義独裁の形態をとるプロレタリア独裁にある。

毛主席がその偉大な著作『新民主主義論』のなかで真っ先に提起した問題は、ほかでもなく、**中国はどこへいくのか**ということであった。毛主席はこのマルクス・レーニン主義の輝かしい著作のなかで、中国革命と世界革命の歴史的経験を全面的に、深く掘りさげて、系統的に総括して、新民主主義革命の政治、経済、文化の綱領を科学的に作成するとともに、新民主主義革命から社会主義革命への移行の道をひじょうに明確にさし示した。毛主席はつぎのようにのべている。「**この革命の第一歩、第一段階は、けっして中国のブルジョア階級の独裁する資本主義社会を樹立するものではなく、また樹立できるものでもない。それは、中国のプロレタ**

リア階級を指導階級とする中国の革命的諸階級の連合独裁の新民主主義社会を樹立するものであり、これによってこの第一段階を終えるのである。それから、さらにこれを第二の段階に発展させて、中国の社会主義社会を樹立するのである。」

毛主席は、中国にブルジョア独裁を樹立しようとする反動的謬論にきびしい反ばくをくわえた。毛主席は、中国のおかれている内外の環境からみて、ブルジョア独裁の資本主義社会を樹立することを夢みるものがあるならば、それは最後には帝国主義のふところに身を投じ、いままで通り中国を帝国主義の植民地・半植民地にし、帝国主義の反動的世界の一部分にするだけである、と明確に指摘している。毛主席が痛烈に反ばくをくわえているのは、すでに悪名を天下にとどろかせていた右翼日和見主義分子王明だけでなく、いま摘発されている資本主義の道をあゆむ党内最大の実権派でもあったのである。

資本主義の道をあゆむこの党内最大の実権派は、古株の日和見主義分子、修正主義分子であり、わが党内にまぎれこんだブルジョア階級の代表者である。

はやくも一九二〇年の初期に、かれは裏切り者陳独秀と瓜二つの論調をまきちらしていた。かれはプロレタリア革命派をあしざまに攻撃し、権力の奪取は、「中国の現状からみて、この

ように幼稚なプロレタリア階級がいますぐにおこないえないのは当然である。はるか遠い将来のことである以上、多くのことばをついやして討議する必要はない」①などといった。

蔣介石の「四・一二」反革命クーデターの直後、かれはまた武漢で裏切り者陳独秀に追随し、数千丁の小銃を国民党に引き渡すよう労働者糾察隊に命じた。しかも、国民党中央執行委員会労働者部が招集した会議にみずから出席して、「湖北全省総工会がすすんで労働者糾察隊を解散したことの意義とその経過」②について報告した。

毛主席の『新民主主義論』が発表されると、かれはまたもとびだしてきて、毛主席を直接攻撃し、『新民主主義論』に反対する言論をさかんにふりまいた。かれは、こともあろうに蔣介石を「革命の旗じるし」とまでもちあげ、さらに、「中国革命は国民党の三民主義の旗のもとですすめていく方が、少なくとも民主主義革命のこの段階では、他の旗をかかげるよりずっと順調にいくと思う」③などといった。かれは、「われわれはどうして三民主義を実行するとは

① 『クラブにたいする過去の批判と将来の計画』、一九二三年八月二十日。
② 漢口『民国日報』、一九二七年七月五日。
③ 『中国革命の戦略と戦術の問題』、一九四二年十月十日。

いわず、むりやり他のやり方をとろうとするのか」①と毒づいた。ここで、この古株の日和見主義者は、革命に反対し、革命を売り渡すかれの裏切り者の正体をむきだしにしたのである。

抗日戦争の勝利後、アメリカ帝国主義はその手先蔣介石をつかって、中国をかれらの独占する植民地にしようとたくらんだ。このとき、中国人民は帝国主義、封建主義、官僚資本主義と生死をかけた闘争をおこなっていた。これは中国の二つの運命、二つの前途にかかわる大決戦であった。権力の問題がいっそう先鋭な形で、プロレタリア階級のまえに提起されていた。毛主席は時を移さず全党と全国人民にこのことをはっきりと指摘した。毛主席は、『抗日戦争勝利後の時局とわれわれの方針』というこの輝かしい演説のなかでつぎのように指摘した。「どういう国を建てるかが今後のたたかいである。プロレタリア階級の指導する、人民大衆の、新民主主義の国家を建てるのか、それとも、大地主、大ブルジョア階級独裁の、半植民地的・半封建的な国家を建てるのか。これはひじょうに複雑なたたかいとなるであろう。目下のところ、この闘争は、蔣介石が抗戦の勝利の果実を横取りしようとし、われわれがその横取りに反対する、そうした闘争としてあらわれている。この時期にもし日和見主義があるとすれば、そ

① 『中国革命の戦略と戦術の問題』、一九四二年十月十日。

れはあくまでたたかうということをせず、人民のものとなるべき果実をみずからすすんで蔣介石に献上するものである。」毛主席はさらに指摘している。「蔣介石は、人民からは、わずかな権利もかならずうばい、わずかな利益もかならずとりあげる。われわれはどうか。われわれの方針は、まっこうから対決し、一寸の土地もかならず争うことである。」「現在、蔣介石はもう刀をといでいる。したがって、われわれも刀をとがなければならない。」

毛主席がここで批判している日和見主義の代表とは、ほかでもなく、資本主義の道をあゆむ党内最大の実権派であった。この古株の日和見主義者は、中国の二つの運命、二つの前途にかかわる大決戦の重大な歴史的時点で、またも革命に反対し、革命を売り渡すかれの民族的投降主義、階級的投降主義の路線を系統的にうちだしたのである。かれは、「中国革命の主要な闘争形態はすでに平和的、議会的なものに変わっており、闘争は合法的な大衆闘争と議会闘争である」①とさかんに主張した。そして、蔣介石にすべての軍隊、すべての武器をひき渡して、それを「国軍、国防軍、保安隊、自衛隊とする」こと、軍隊内の「党組織を解散する」ことをわが党に要求し、「軍隊にたいする直接の指導と指揮をやめて、国防部に統一する」②（つま

①② 『時局問題についての報告』、一九四六年二月一日。

り国民党の国防部のこと）ことをわが党に要求した。かれはこのような手をつかって、蔣介石にこびへつらい、装いをこらして、お目見得にあずかろうとしたのである。かれは恥知らずにも、「選挙活動のやり方をおぼえ、みんながわれわれに投票するよう」にしなければならないとか、「われわれは与党（つまり国民党政府の与党のこと）の一つになったのであり、野にあるのではなく朝にあるのであり、一部のものは役人をつとめることになるだろう。中央政府の役人は、一九二七年につとめたことがあるが、かれらが戦争をはじめたのでご破算になった。こんどは役人をつとめても、戦争のためにご破算になることはあるまい」①などといった。このひと言で、かれは心のなかの秘密を完全にさらけだしたのである。

プロレタリア階級の裏切り者――右翼社会民主主義者、古株の修正主義者ベルンシュタイン、カウツキーの手合いはみな、議会の道を宣伝し、暴力革命に反対し、プロレタリア階級の利益を売り渡してブルジョア階級の反動政権の装飾品や共犯者になった。資本主義の道をあゆむ党内最大の実権派とかれらはまったく同じしろものである。もし違ったところがあるとすれば、当時中国のプロレタリア階級がすでに百二十余万の軍隊を擁し、しかも一億三千余万の人

① 『時局問題についての報告』、一九四六年二月一日。

口をもつ地域に人民政権を樹立しているときに、かれはなおも人民の政権、人民の軍隊をもろ手にささげてひき渡そうとしたことである。このような大投降、大裏切りはいっそう卑劣なものであり、いっそう悪らつなものである。

資本主義の道をあゆむ党内最大の実権派が抗日戦争勝利の果実を大いに売り渡そうとしているちょうどそのころ、フランス、イタリアにはトレーズ、トリアッチといったたぐいの「共産党」の頭目があらわれ、人民が血であがなった勝利の果実でブルジョア階級と政治的取り引きをおこなった。かれらはブルジョア階級に数十万丁の銃――プロレタリア階級の革命的武装力――をひき渡して、その代わりにブルジョア国家の「副首相」といったたぐいの官職にありつき、歴史の罪人となりさがった。この歴史の転換点で、われわれの偉大な指導者毛主席は、**「人民の武装力は、たとえ一丁の銃、一発の弾丸でも保持しなければならず、ぜったいに引き渡すことはできない。」「人民のかくとくした権利をかるがるしく手放すことは断じてゆるされない。これは戦いによって、まもらなければならない。」「もしかれらが戦いたいというなら、かれらを徹底的に殲滅するまでである」**とわれわれに教えた。われわれの偉大な指導者毛主席はなにものをもおそれぬプロレタリア階級の英雄的気概で、国際的規模の投降――「銃の

ひき渡し」――の逆流にさからい、敢然とたたかい、敢然と勝利をかちとって、全世界のプロレタリア革命派に輝かしい手本をうちたてた。無敵の毛沢東思想ははかり知れない威力を示したのである。

われわれの党、われわれの人民、われわれの軍隊は、毛主席のすぐれた指導のもとに、正しい方向をめざし、しっかりと銃をにぎり、あらゆる障害を突破して、革命の大道を勝利のうちに前進し、ついに人民解放戦争の偉大な勝利をかちとり、中華人民共和国をうちたてた。これは、歴史が資本主義の道をあゆむ党内最大の実権派の階級的投降主義と民族的投降主義にあたえた無情の判決であった。

（二）

中華人民共和国の成立とともに、歴史は新しい段階にはいった。すなわち、新民主主義革命の段階から社会主義革命の段階にはいったのである。このとき、二つの路線の闘争の焦点は、うちたてられたばかりの新中国が、いったい社会主義の道をあゆむのか、それとも資本主義の道をあゆむのかということにあった。この闘争は、究極において、中国でプロレタリア独裁を

実行するのか、それともブルジョア独裁を実行するのかという問題である。

新民主主義革命の全国的勝利の前夜、毛主席はその輝かしい著作、『中国共産党第七期中央委員会第二回総会での報告』のなかで、つぎのようにはっきりと指摘した。「中国革命が全国で勝利をおさめ、土地問題が解決されたのちも、中国にはまだ二種類の基本的な矛盾が存在する。ひとつは国内的な矛盾、すなわち労働者階級とブルジョア階級との矛盾である。もうひとつは対外的な矛盾、すなわち中国と帝国主義国との矛盾である。したがって、労働者階級の指導する人民共和国の国家権力は、人民民主主義革命の勝利ののちにおいても、これを弱めるのではなくて、強めなければならない。」

その後また、毛主席は過渡期における党の総路線についての講話のなかで、一九四九年十月一日の中華人民共和国の成立は、新民主主義革命の段階の基本的終結と社会主義革命の段階の開始を示している。「この過渡期における党の総路線と総任務は、かなり長い期間に、国家の社会主義工業化を一歩一歩実現し、また国家の農業と手工業と資本主義工商業にたいする社会主義的改造を一歩一歩実現することにある。この総路線はわれわれのすべての活動を照らす灯台であり、どの活動もそれからはなれると、右翼的または『左』翼的な誤りを犯すことにな

る」と指摘した。

こうした新しい大転換の時期に、資本主義の道をあゆむ党内最大の実権派はまたもとびだしてきて、ブルジョア階級の代弁者として、毛主席のプロレタリア革命路線に対抗した。かれは都市と農村の資本主義を発展させるために、気違いのように奔走し、叫びたてた。かれは「新民主主義制度の強化のためたたかおう」①というスローガンをうちだし、「中国には資本主義が多すぎるのではなく、資本主義が少なすぎるのだ」とか、「資本主義的搾取を拡大しなければならない。このような搾取は進歩的なものである」②とか、「搾取が多ければ多いほど功績も大きい」、「この歴史的功績は永遠に滅びないものである」③などとデタラメをならべた。かれは、農村で富農経済を発展させ、それを長期にわたって温存することを主張した。ブルジョア共和国のプランが完全に破産をとげたあとで、なおも中国において資本主義を発展させ、ブルジョア独裁を樹立する反動路線をうちだしたのである。

① 『政治協商会議全国委員会会議における演説』、一九五一年十一月四日。
② 『愛国主義かそれとも売国主義か』より。
③ 『全国青年第一回大会における演説』、一九四九年五月十二日。

資本主義の道をあゆむ党内最大の実権派は、中国が社会主義の道をあゆむことに必死になって反対した。かれは、「中国でかなりきびしい社会主義の措置をとるのは、まだまだかなり先のことである」①とか、二十年かかるか、三十年かかるか、期間についての見通しは一致しないが、いずれにしろ資本家とは数十年協力して、まず工業化を実現し、そのあとで工業の国有化と農業の集団化をはからなければならないとか、「将来工業化され、工場がふえれば、生産される品物も多くなる。そのときこそ、社会主義にのりださなければならない」②などといった。要するに、「将来中国の工業が生産過剰になったときこそ、社会主義にのりだすときだ」③というのである。「工業が生産過剰になったとき」とはよくもいえたものだ。工業の生産過剰は、資本主義の特徴である。ここで、資本主義を発展させようとするかれの凶悪な野望がひと言ですっかり暴露されている。実際には、かれのこうした言いぐさはなにも新しいしろものではない。それは、ソ連建国の初期、レーニン、スターリンによって粉砕されたトロツ

① 『中国人民政治協商会議第一回会議における演説』、一九四九年九月二十一日。
② 『全国青年第一回大会における演説』、一九四九年五月十二日。
③ 『工商業者の座談会における談話』、一九四九年四月二十五日。

キー、ブハーリン、ルイコフら古株の修正主義者の「生産力論」のガラクタにほかならない。かれはプロレタリア独裁と先進的な社会主義的生産関係が生産力の発展におよぼす促進作用を根本的に否定し、労農大衆が社会の富の創造者であり、歴史の発展をうながす真の原動力であることを根底から否定している。かれの眼中にあるのは例の資本家のだんな方だけで、かれはひたすらこの連中にたよって「永遠に滅びない」「功績」をたて、かれの「ユートピア」をきずきあげようとしていたのである。

かれの口にする「社会主義」とは、いったいどのようなものなのだろうか。つぎにあげるかれの奇文を見てもらいたい。「現在、新民主主義の段階では、あなたたち資本家はあなたたちの積極性を十分に発揮することができるが、将来社会主義に移行するときは、どうしたらよいだろうか。以前、わたしは宋斐卿氏（天津東亜毛織物工場社長、頑迷な反革命分子。解放後、資本主義の道をあゆむこの党内最大の実権派によってとてつもなくもちあげられたが、まもなく国外に逃亡した）に話したことがある。わたしはこういった。『あなたはいまたった一つの工場しか経営していないが、将来、二つ、三つ……八つの工場を経営することができるだろう。社会主義になって、国家が命令をくだせば、あなたは工場を国家に手渡すか、国家があなたの工場を買い上げることになる。そのとき、国家に一時カネがなければ、公債を発行してもよい。そののち、国家はこの八つの工場を、やはりあなたに渡して経営させる。あなたはこれまで通り社長だが、国家の工場の社長なのだ。あなたは腕があるから、さらに八つの工場をあたえ、あわせて十六の工場をまかせる。あなたの月給は減らさないどころか、ふやしてあげることになるが、あなたはりっぱに経営していかなければならない。あなたにやる気はあるか』と。宋氏は、『それなら、もちろん、やってみましょう』といってくれた。将来、みなさんを招いて会合をひらき、どのようにして社会主義に転化させるかを討議するときには、みなさんはきっとまゆをひそめることなく、晴々とした笑顔でその会合に出席することだろう」①

なんと結構なことだろう。資本家は一方の手で八つの工場を国家に売りつけ、もう一方の手で十六の工場を国家からもうける。これを「社会主義」というのだ。当時、一群の資本家どもは、果たして「晴々とした笑顔」で、「以前は共産党の腹が全然読めなかったが、いまでは、少しわかるようになった」といった。ところが、資本主義の道をあゆむ党内最大の実権派も卑屈な態度で、「わたしがあなたたちに読ませてあげよう。あなたたちが望むなら、どんな腹で

① 『工商業者の座談会における演説』、一九四九年四月二十五日。

も見せようではないか」①とかれらに答えた。これは、両手でうやうやしくささげて贈り物をとどけるようなものである。新旧修正主義者はみな「平和的に社会主義にはいっていく」などといっているではないか。これこそ、そのいきいきとした標本である。かれらはまぎれもなく資本主義に「はいって」いったのである。わが党内に「はいって」きたこのブルジョア階級の最大の代表者の醜悪な正体も、みずからの手であますところなくさらけだしているではないか。

資本主義の道をあゆむ党内最大の実権派は世間をあざむくために、かつてプロレタリア独裁ということばをもっともらしく口にしたこともあったが、かれのいうプロレタリア独裁とは、ニセのプロレタリア独裁、真のブルジョア独裁であった。

かれは労働者階級を極度に敵視し、「労働者階級にも信頼できないものがいる」とか、「労働者階級に依拠すれば問題はないと思いこんではならない」②などとわめきたてた。かれは、制限と反制限を主要形態とするプロレタリア階級とブルジョア階級とのあいだの階級闘争を一

① 『全国青年第一回大会における演説』、一九四九年五月十二日。
② 『天津工作にたいする指示』、一九四九年四月二十四日。

挙にまっ殺して、「ここ七、八年内は制限をくわえてはならない。それは国家にとっても、労働者にとっても、生産にとっても有利である」①と公然と叫びたてた。また、「原料から市場まで、国営企業と私営企業がいっしょに相談し、いっしょに分配しなければならない」とか、「金はみんなでもうけよう」②などとさかんに宣伝した。かれはまた、プロレタリア階級との「闘争」をブルジョア階級に公然と呼びかけ、「あなたたちは労働者とたたかわなければならない。もしたたかわないで、将来あなたたちの工場が労働者にたたきつぶされれば、そのときは、共産党がよくないなどとうらみ言をいう筋合いがなくなる」③といった。見てもらいたい。かれの目からみれば、労働者階級の指導するプロレタリア独裁の国家は、なんとブルジョア階級に対処するものではなくて、逆に労働者階級に対処するものなのである。かれはさらに、「いまわれわれは、あるひとつの階級の独裁を必要としてはいない。われわれは全人民を代表しなければならない」④と公言した。これはプロレタリア独裁を徹底的に裏切るものではないだろうか。

①②③ 『工商業者の座談会における談話』、一九四九年四月二十五日。
④ 『天津工作にたいする指示』、一九四九年四月二十四日。

かれは気違いのように農業の社会主義的改造に反対し、農業の協同化を破壊し、先頭にたって組織化を要求した貧農を、破産して「単独経営のできなくなった貧農」①にすぎないと中傷した。また、農業互助組を農業生産協同組合にまで高める主張は、「誤った、危険な、空想的な農業社会主義の思想である」②と中傷した。かれはひとにぎりの右翼日和見主義分子とグルになって、協同組合に大ナタをふるい、前後二十万にのぼる農業協同組合をきりすててしまった。かれはまた、「なにを自由放任というのか。作男の雇用や単独経営は自由放任にすべきで、みんなが馬三頭、すき一ちょう持てるようになれば結構なことだ。作男の雇用を許さず、単独経営を許さないことにたいしては放任するわけにはいかず、馬三頭の所有に干渉することにたいしても放任するわけにはいかない」③と憎々しげに語った。こうして、かれは富農にだけ搾取拡大の自由をあたえ、貧農・下層中農には組織化して互助、協力をおこなう自由をあたえず、広大な農村を富農の天下に変え、ブルジョア階級のプロレタリア階級に反抗する陣地に変えようとしたのである。

① 『安子文らにたいする指示』、一九五〇年一月二十三日。
② 『山西省党委員会の「ふるい解放区の互助組織を一歩高める」についての評語』、一九五一年七月三日。
③ 『安子文らにたいする指示』、一九五〇年一月二十三日。

政権は、従来から一つの階級が他の階級を抑圧する道具である。もし、誕生したばかりのこの新中国の政権が社会主義を発展させず、資本主義を発展させ、ブルジョア階級に制限をくわえず、プロレタリア階級に制限をくわえ、富農に制限をくわえず、貧農に制限をくわえ、ブルジョア階級と闘争をおこなわず、プロレタリア階級と「闘争」をおこなうならば、ブルジョア階級の反抗を弾圧して、社会主義革命と社会主義建設をまもるというその本来の機能を完全に放棄してしまうことになる。そうなれば、新中国の政権の性格は根本的に変わってしまうのではないか。毛主席は、はっきりとこう指摘している。**「われわれの国家に、社会主義経済を樹立しなかったならば、どのような状況になるだろうか。ユーゴスラビアのような国に変わり、事実上ブルジョア階級の国家に変わることとなり、プロレタリア独裁はブルジョア独裁に変わることになり、しかもそれは反動的で、ファッショ型の独裁となるであろう。これは十分に警戒しなければならない問題である。同志のみなさんにじっくりと考えてもらいたい。」**

（三）

生産手段所有制の社会主義的改造が基本的になしとげられてのち、社会主義社会にはなおも階級と階級闘争が存在するかどうか。プロレタリア独裁を堅持して社会主義革命をあくまでやりぬくべきなのか、それともプロレタリア独裁を解消して資本主義の復活に道をきりひらくべきなのか。これは、国際共産主義運動の歴史においてまだ解決されていない重大な理論的問題であり、実践的問題である。

この歴史的転機のいま一つのカギとなる時点で、われわれの偉大な指導者毛主席は、『人民内部の矛盾を正しく処理する問題について』、『中国共産党全国宣伝工作会議での講話』などの著作を発表した。これらの画期的な輝かしい文献は、国際的なプロレタリア独裁の歴史的経験を総括し、マルクス主義の発展史上はじめて、科学的に、系統的に、また深く掘りさげて社会主義社会の矛盾、階級と階級闘争について論証した。これは、マルクス・レーニン主義がまったく新しい毛沢東思想の段階に発展したことを示す重要な指標である。

毛主席は、つぎのようにはっきりと指摘している。社会主義社会における「**階級闘争はまだ**

終わってはいない。プロレタリア階級とブルジョア階級とのあいだの階級闘争、各政治勢力のあいだの階級闘争、プロレタリア階級とブルジョア階級とのあいだのイデオロギー面での階級闘争は、なお長期にわたる、曲折したたかいであり、ときにはひじょうに激しいものでさえある。」「社会の一部には、まだ資本主義制度の復活を夢みるものがおり、かれらは、思想の面をふくむあらゆる面から労働者階級に闘争をしかけてくる。」

ところが、資本主義の道をあゆむ党内最大の実権派は、逆に、「階級闘争消失論」を極力宣伝した。わが国には、もはや階級と階級闘争はなくなり、「資本家も、地主も、富農も社会主義社会にはいろうとしている」①とか、「今後は、革命闘争もなくなり、土地改革もなくなり、社会主義的改造もなくなる」とか、「いまでは地主階級もなくなったし、ブルジョア階級もわれわれの手で消滅させられたので、英雄も腕のふるいどころがなくなった」②などとデタラメをならべたてた。

なにが「階級闘争消失論」だ。これは、まったくの人だましのつくり話である。これは、フ

① 一九五六年七月十三日、外国の賓客との談話。

② 『上海市党員幹部大会における演説』、一九五七年四月二十七日。

ルシチョフの手合いが党をのっとり、国家をのっとるためにもちいた「全人民の国家」、「全人民の党」と完全に同じしろものであり、プロレタリア独裁にたいするもっとも恥知らずな、もっとも徹底した裏切りである。資本主義の道をあゆむ党内最大の実権派は、「階級闘争消失論」の煙幕をはりめぐらして、プロレタリア階級と勤労人民を麻痺させ、地主分子、富農分子、反革命分子、悪質分子、妖怪変化をいっせいにとびださせてプロレタリア階級に気違いじみた攻撃をかけさせ、社会主義の経済的土台をつきくずし、プロレタリア独裁をくつがえし、資本主義を復活させようとしたのである。

資本主義の道をあゆむ党内最大の実権派は、この時期に、あるときは舞台にのぼり、あるときは舞台の裏で、社会主義とプロレタリア独裁にくりかえし狂暴な攻撃をくわえた。一九五七年、ブルジョア右派がさかんな攻撃をくりひろげるまえに、かれは社会主義制度をあしざまに攻撃し、「絶対的によいという制度はありえない」とか、「われわれの制度だけがよく、他の制度はみな不適当だと考えるのはよくない」①などとデタラメをいった。かれは、ブルジョア階級の「両院制」を鼓吹して、「政治協商会議と全国人民代表大会は、ある点では上院と下院

① 一九五六年六月十七日、外国人との談話。

の性格をもっている」、「ただ、憲法にはその規定がないだけだ」①などと語った。政治協商会議と全国人民代表大会をブルジョア階級の上院と下院に変えようと夢みているが、これは章伯鈞・羅隆基同盟の「政治設計院」と完全に波長が合っている。一九五九年の党の廬山会議で、かれは、「海瑞」をもって自任している大陰謀家、大野心家、大軍閥彭徳懐を積極的に支持し、毛主席をはじめとする党中央の指導をくつがえそうと夢みた。彭徳懐の問題が会議で摘発されてからも、かれはなおも彭徳懐としめしあわせて、ひそかに風をおくって火を点じ、当初に準備されていた会議綱要を毛主席のプロレタリア革命路線に反対する「左」翼日和見主義反対の文献に書きあらためようとたくらんだ。その後、かれはまた廬山会議を公然と攻撃して、「廬山会議は誤りを犯した」、「右翼日和見主義に反対すべきでなかった」②とか、「右翼日和見主義に反対したのは間違いだ」、「それは全国に後遺症をのこした」③などとデタラメをいった。とりわけ、三年におよぶ一時的困難の時期に、かれは内外のあらゆる妖怪変化と

① 一九五六年十一月十六日、全国人民代表大会常務委員会会議における講話。
② 『済南軍区幹部座談会における談話』、一九六四年七月九日。
③ 『河北省地方党委員会書記の座談会における談話』、一九六四年七月二日。

結託して、いっそう気違いのように反革命の資本主義復活をさかんにおしすすめた。かれは総路線、大躍進、人民公社に悪どい攻撃をくわえ、われわれの経済は崩壊の瀬戸ぎわに立っているとか、いまは「すばらしい情勢ではない」①とか、「経済は均衡を失っている」②とか、「三分が天災で、七分が人災だ」とか、「労農同盟にきわめて先鋭な矛盾が発生している」などとわめきちらし、しかも下心をもって、いま農民の気持ちも「のびやかではなく」、また幹部の気持ちも「のびやかではない」③などとあおりたてた。かれはまた、「反対派があらわれるべきだ。人民のあいだでもよいし、党内でもよい。公然たる反対派があらわれるべきだ」④とさかんにわめきたてて、ブルジョア階級の登場のために世論の準備をおこなった。かれは「三自一包」（自留地をできるだけ多くのこし、自由市場をできるだけ多く設け、自ら損益に責任を負う企業をできるだけ多くつくり、農業生産の任務を一戸ごとに請け負わせることをいう――訳注）を鼓

① 『第十八回最高国務会議における演説』、一九六二年三月二十一日。
② 『党中央委員会弁公庁の石家荘、無錫調査組への指示』、一九六二年四月二十四日。
③ 『中央工作会議における演説』、一九六一年五月三十一日。
④ 『中央工作会議における演説』、一九六二年二月八日。

吹し、さかんに単独経営の風を吹かせ、「工業面では十分に後退し、農業面でも例えば生産任務を一戸ごとに請け負わせたり、単独経営を許したりするところまで十分に後退すべきだ」①とか、「社会にいくらかブルジョア分子が生まれても、おそろしいことではない。資本主義の氾濫をおそれてはならない」②などと語った。

国際闘争においても、かれは「三降一減」（帝国主義に投降し、現代修正主義に投降し、各国反動派に投降し、被抑圧人民の革命闘争をおさえつけることをいう――訳注）「三和一少」（帝国主義、反動派、現代修正主義とに和を求め、各国人民の革命闘争にたいする支援を少なくすることをいう――訳注）を鼓吹して、「アメリカとも、われわれは良好な関係をたもっていきたい」とのべ、さらに、アメリカとの「友好関係を増進させ」③ようとした。かれはまた、フルシチョフは「ソ連で資本主義を復活させることはできない」とか、フルシチョフの帝国主義反対は「ほんものだ」とか、「われわれはかれらと連合し」、「共通点を求めて、相違点をのこしておき」、

① 一九六二年六月の談話。
② 一九六一年十月二十二日の談話。
③ 一九六三年三月六日、外国の賓客との談話。

「共同で帝国主義に反対しなければならない」①などと語った。かれはビルマ共産党に武器をすてることを公然と要求して、「あなたがたはこれらの武器がなくてもよい。地下に埋めてもよいし、または部隊を国防軍に編成がえしてもよい」②とか、ネ・ウィンに「協力」せよ、「協力してなにをするか」、「社会主義革命をやる」のだ③などといった。

一九六二年八月、かれは、プロレタリア独裁を裏切り、修養すればするほど修正主義になる例の黒い『修養』をあらためて発行して、当時ひとにぎりの反革命修正主義分子に資本主義復活の世論をつくりだすための「主題歌」を提供した。

こうした魂をゆさぶる闘争の事実が物語っているように、資本主義の経済的土台が基本的にたたきこわされたのちも、資本主義の道をあゆむ党内最大の実権派はたえず資本主義復活の罪悪活動をおこなってきたのである。とりわけ、三年におよぶ一時的困難の時期に、かれは凶悪な正体をすっかりさらけだして、「反対派があらわれるべきだ」とか、もとの道へひきかえす

① 一九六二年六月二十七日、外国の同志との談話。
② 一九六三年四月二十六日、外国人との談話。
③ 一九六三年七月二十日、外国の同志との談話。

べきだとかいった反党の黒い旗をかかげて、政治、経済、思想・文化戦線から全面的に党と社会主義に攻撃をかけ、プロレタリア政権にきわめて重大な脅威をあたえた。もし、かれの例の反革命修正主義路線にもとづいてやっていくならば、農村には階級の大分化があらわれ、また、都市には新しいブルジョア分子が大量にあらわれることになるであろう。そして、広範な労働者や貧農・下層中農は「二度目の苦しみ」をなめ、もう一度奴隷にされ、牛馬同様の苦しい生活につき落とされることになるであろう。さらに、わが国の社会主義の経済的土台は徹底的に破壊され、プロレタリア政権は根底から変質し、歴史は半植民地・半封建的社会のふるい道にふたたびひきもどされることになるであろう。これはなんという危険な情景だろうか。

一九六二年、われわれの偉大な指導者毛主席は党の第八期中央委員会第十回総会で、「絶対に階級闘争を忘れてはならない」という偉大な呼びかけを発して、プロレタリア階級のブルジョア階級にたいする全面的大反撃の進軍ラッパを吹きならした。資本主義の道をあゆむ党内最大の実権派は、「晩秋のイナゴ」のように日一日とその最後の日に近づいていったのである。

（四）

プロレタリア独裁の歴史がわれわれに教えているように、プロレタリア独裁の条件下の階級闘争でもっとも根本的なことは、なんといっても、やはり権力の問題である。

われわれの偉大な指導者毛主席は、国際的なプロレタリア独裁の豊かな歴史的経験を総括し、また資本主義の道をあゆむ党内最大の実権派が資本主義復活の陰謀をすすめていたという重大な事実を考慮して、みずからなん億という革命的大衆をたちあがらせ、指導して、史上に例をみないプロレタリア文化大革命をくりひろげた。このときから、わが国におけるプロレタリア独裁下の革命はより深く、より広い新しい段階にはいったのである。それは、毛主席のプロレタリア階級の司令部と資本主義の道をあゆむ党内最大の実権派のブルジョア階級の司令部とのあいだの大決戦である。

偉大な歴史的文献――中国共産党中央委員会の一九六六年五月十六日の『通知』のなかで、毛主席はこう指摘している。**「党内、政府内、軍隊内および文化界の各方面にまぎれこんだブルジョア階級の代表者は、反革命修正主義分子であって、いったん機が熟せば、権力を奪取して、プロレタリア独裁をブルジョア独裁に変えようとする。これらの人物のうち、一部のものはすでにわれわれによって見破られているが、一部のものはまだ見破られておらず、しかも一部のものは現にわれわれから信頼され、われわれの後継者として養成されている。たとえば、いまわれわれの身辺に眠っているフルシチョフ式の人物がそれである。各級の党委員会はこの点に十分注意しなければならない。」** 毛主席が摘発した、われわれの身辺に眠っている「フルシチョフ式の人物」とは、資本主義の道をあゆむ党内最大の実権派と、かれをかしらとするブルジョア階級の司令部のことである。

ここ十七年らい、毛主席の革命路線がなぜたえず抵抗と反対をうけてきたのか。資本主義復活の暗流がなぜくりかえし、くりかえしおこってきたのか。そのもっとも主要な原因は、ほかでもなく、プロレタリア独裁の機構内にこのようなブルジョア階級の司令部がひそんでいたからである。このブルジョア階級の司令部は、プロレタリア独裁にたいするもっとも大きな脅威であり、社会主義の祖国にとってもっとも大きな災である。

偉大なプロレタリア文化大革命は、資本主義の道をあゆむ党内のひとにぎりの実権派のために弔いの鐘をうちならした。資本主義の道をあゆむ党内最大の実権派は、いまひとりの資本主

義の道をあゆむ党内最大の実権派とグルになり、滅亡直前の凶暴さを発揮して最後のあがきをこころみ、ブルジョア反動路線をうちだし、これをおしすすめた。かれらは毛主席の指示にそむいて、大量の工作組をおくりだし、革命的大衆運動をおさえつけた。中国のフルシチョフが直接にぎっていた清華大学と北京師範大学第一附属中学では、闘争のほこ先を革命的大衆にむけ、少なからぬ革命的大衆を「反革命」にしたてあげた。幹部の問題では、大勢のものに打撃をあたえ、ひとにぎりのものを保護した。かれが批准・伝達した北京大学工作組の状況報告のある号は、革命事件を反革命事件といいくるめ、そのうえ、これにならって事態を処理するよう全国に要求し、白色テロをつくりだして、革命派を包囲攻撃し、大衆をそそのかして大衆同士たたかわせ、毛主席がみずから点じたプロレタリア文化大革命の燃えさかる烈火を消しとめようとたくらんだ。

ちょうどこのカギとなる時点で、われわれの偉大な指導者毛主席は、党の第八期中央委員会第十一回総会を招集し、偉大な歴史的意義をもつ大字報『**司令部を砲撃しよう**』を発表するとともに、みずから主宰して、『**中国共産党中央委員会のプロレタリア文化大革命についての決定**』を制定し、資本主義の道をあゆむ党内最大の実権派をかしらとするブルジョア階級の司令

部を徹底的に暴露し、かれが一手におしすすめてきたブルジョア反動路線の破産を宣告し、毛主席のプロレタリア革命路線の勝利を宣言した。これは、毛主席のプロレタリア革命とプロレタリア独裁についてのマルクス・レーニン主義の学説にたいするいまひとつの偉大な貢献である。

偉大な統帥者毛主席のみずからの指導のもとに、全国の広範な革命的大衆は、よりすさまじい勢いの偉大な革命的大衆運動をまきおこし、ついに、ブルジョア階級の党内第一の代理人とかれの悪党一味をつまみだした。全国的にもりあがった革命的大批判の高まりのなかで、かれらはなん億という革命的軍民のはりめぐらした網のなかにおちこんでおり、みんなに追いまわされるネズミのような有様になってしまっている。資本主義の道をあゆむ党内最大の実権派というこの「とてつもない大物」とは、いったい、どのようなしろものなのか。かれ自身の四十余年にわたるエセ革命、反革命の罪悪史がすでに反ばくの余地のない答をだしている。これらのすべてについては、動かせない証拠があり、山のような罪状があきらかにされている。それをいいのがれたり、否定したり、またそれに抵抗したりすることができるだろうか。「**借問瘟君欲何往、紙船明燭照天焼**」（借問す瘟君（えきびょうがみ）何へ往（い）かんと欲（ほっ）するや　紙船（かみぶね）と明き燭（ひ）天を照（てら）して

焼かん）

プロレタリア文化大革命はわれわれの偉大な人民の偉大な祝日である。無限に輝く毛沢東思想の陽光に照らされて、無数の赤旗が大海原のようにはためき、なん億という大衆が戦闘し、学習し、ブルジョア階級を批判している。毛沢東思想はなん億という大衆の糧、武器、羅針盤になっている。かれらは毛主席のりっぱな戦士となり、プロレタリア階級の祖国を子々孫々永遠に変色させないと誓っている。毛沢東思想はなん億もの大衆を団結させて、うちくだくこともできなければ、攻め落とすこともできない偉大な物質的力にしており、その力は旧世界をゆるがし、新世界を創造しているのである。

「社会主義だけが中国を救うことができる」

われわれの偉大な教師、偉大な指導者、偉大な統帥者、偉大な舵手毛主席は、数十年のあいだ、意気さかんな堂々たる革命の大軍を統率して、窮寇を追い、蒼竜を縛り、宏いなる図を起て、腐れる悪を征し、中国革命の船をみちびいて、激流をのりこえ、暗礁をさけ、風にのり波をけって、勝利のうちに前進させ、マルクス・レーニン主義をまったく新しい毛沢東思想の段

階にひきあげた。

新民主主義革命は社会主義革命にとって必要な準備であり、社会主義革命は新民主主義革命の必然的な趨勢である。新民主主義革命の勝利後、すこしも停とんさせることなく革命を社会主義の段階におしすすめなければならないと指摘したのは、ほかならぬ毛主席である。

鉄砲から政権がうまれる。帝国主義とすべての反動派の支配下にある旧世界は鉄砲をつかわなければ改造することができないと指摘したのも、ほかならぬ毛主席である。

プロレタリア階級が権力を奪取してからも、プロレタリア独裁を堅持し、強化し、社会主義の道をあゆむことを堅持しなければならない。どれほどたくさんの事をかかえていても、片時もプロレタリア独裁を忘れてはならないと指摘したのも、ほかならぬ毛主席である。

史上に例をみないプロレタリア文化大革命をみずからおこし、社会主義社会の全歴史的時期にわたってなおも階級と階級闘争が存在し、かならずプロレタリア独裁のもとでの革命を最後までやりぬかなければならないと指摘したのも、ほかならぬ毛主席である。

「東の空はあからみ、太陽がさしのぼっていく。中国には毛沢東があらわれた。」

毛主席のさし示す方向こそ、全世界の革命的人民の方向である。毛主席のきりひらいた道こ

そ、全世界の革命的人民の前進すべき道である。

中国はどこへいくのか。世界はどこへいくのか。歴史の車輪は、いま毛沢東思想のさし示す方向にむかってまっしぐらに前進をつづけているのである。

『修養』の核心はプロレタリア独裁への裏切りにある

社会主義の道を歩むのか、それとも資本主義の道を歩むのか

1967年 初版発行　　定価 40 円

出版者　外文出版社（北京阜成門外百万莊）

発行者　中国国際書店（北京 P.O.Box 399）

編号：（日）3050—1670　　3—J—866P

00027

既刊図書案内

★毛沢東著作★

毛沢東著作選　上製 五八〇円　並製 四四〇円

本書は、日本の広範な読者の毛沢東著作学習の必要にこたえて、毛沢東著作選読編集委員会が中国共産党中央委員会毛沢東選集出版委員会の指導のもとに編集した『毛沢東著作選読（甲種本）』（一九六五年四月第二版）を完訳したもので、中国革命の各時期における毛沢東同志の著作の一部三十九編がおさめられている。

毛主席語録　赤色ビニール表紙　一五〇円

中国社会各階級の分析　三〇円

新民主主義論　六〇円

出版者 北京 外文出版社　発行者 中国国際書店（北京）

延安の文学・芸術座談会における講話　四〇円
アメリカの記者アンナ・ルイズ・ストロングとの談話　三〇円
毛沢東同志は論じている——
帝国主義といっさいの反動派はハリコの虎である　四〇円
「人民に奉仕する」「ベチューンを記念する」「愚公、山を移す」　四〇円
全世界の人民は団結して、アメリカ侵略者と
そのすべての手先をうち破ろう　三〇円
——アメリカ黒人、ベトナム南部人民、パナマ人民、日本人民、コンゴ（レ）人民、ドミニカ人民の反米正義の闘争を支持する声明と談話
敵に反対されるのは悪いことではなく、よいことである　三〇円
書物主義に反対する　三〇円
農業協同化の問題について　四〇円

出版者 北京 外文出版社　発行者 中国国際書店（北京）

★重要決定、理論論文★

国際共産主義運動の総路線についての論戦　三四〇円

目次内容

国際共産主義運動の総路線についての提案
ソ連共産党指導部とわれわれとの意見の相違の由来と発展
スターリン問題について
ユーゴスラビアは社会主義国か
新植民地主義の弁護人
戦争と平和の問題での二つの路線
根本的に対立している二つの平和共存政策
ソ連共産党指導部は現代最大の分裂主義者である
プロレタリア革命とフルシチョフ修正主義
フルシチョフのエセ共産主義とその世界史的教訓
フルシチョフはなぜ退陣したか

付　録

ソ連共産党中央委員会が中国共産党中央委員会にあてた書簡
ソ連共産党中央委員会がソ連各級党組織と全共産党員にあてた公開書簡

出版者 北京 外文出版社　発行者 中国国際書店（北京）

人民戦争の勝利万歳　林彪　四〇円

——中国人民の抗日戦争勝利二十周年を記念して

目次内容

抗日戦争の時期における主要な矛盾と党の路線
統一戦線の路線と政策を正しく実行する
農民に依拠し、農村根拠地を樹立する
新しい型の人民の軍隊を建設する
人民戦争の戦略・戦術を実行する
自力更生の方針を堅持する
毛沢東同志の人民戦争にかんする理論のもつ国際的意義
人民戦争によってアメリカ帝国主義とその手先にうち勝つ
フルシチョフ修正主義者は人民戦争の裏切り者である

中国共産党中央委員会のプロレタリア文化大革命についての決定　三〇円

中国共産党第八期中央委員会第十一回総会の公報　三〇円

出版者　北京　外文出版社　　発行者　中国国際書店（北京）

★美術作品選集、写真集★

ベトナム人民はかならず勝利する！アメリカ侵略者はかならず敗北する！

——ベトナム人民の抗米闘争を支援する中国美術家の美術作品選集　二〇〇円

ベトナム人民はかならず勝利する！アメリカ侵略者はかならず敗北する！

——第四集——（写真集）　四〇円

出版者　北京　外文出版社　　発行者　中国国際書店（北京）

近刊預告

★毛沢東著作★

毛沢東選集（第一巻）

哲学論文四編

目次内容

実践論

矛盾論

人民内部の矛盾を正しく処理する問題について

人間の正しい思想はどこからくるのか

文学・芸術について

湖南省農民運動の視察報告

中国の赤色政権はなぜ存在することができるのか

大衆の生活に関心をよせ、工作方法に注意せよ

文学・芸術に関する五つの文献

出版者 北京 外文出版社　　発行者 中国国際書店（北京）

20